第４回　戦後７０年に思う～日本人は戦争好きか？

Ｉ Ｔ生

東京五輪の新国立競技場問題に対する国民の反応をみていると、日本人特有の「集団ヒステリー」という言葉が頭に浮かぶ。経緯を丹念に追うわけでもなく、現代の東京五輪として何を世界に発信するべきか、首都東京の都市論として何を考えるべきかという前向きの議論にはならない。ひたすら、「税金の無駄遣い」の一言のみで、犯人捜しに熱をあげる。税金の無駄遣いというなら、日ごろ医療費や介護費を湯水のように使い、災害に備えることもなく、被災者は当然のごとく社会的保障を求める。それはどうなのか？と首をかしげざるを得ない。

以前触れた、大阪都構想問題もそうだった。当初は、反対派がそうだった。しかし、住民投票間際には、賛成派がそうなった。果たして東京を目指す改革というものが大阪に本当に必要なのか。というような議論はほとんどない。闇雲に、賛成か、反対か。まるで、丁か半かばくちのような争いになっていた。

現在の安保法制の賛否もそうである。なぜ、そういう問題提起がされているのかという根本の議論にならない。戦争反対といいながら、かつて日露戦争や太平洋戦争時に戦争推進の要因となった集団ヒステリーに陥っていることには気付かない。

近年、こうした賛成か反対かといった二元論に陥りがちなのは、東日本大震災の福島原発に端を発した「原発不要論」以降、日本国民がそういう「空気」に流され安くなっているのではないかと感じている。

日本人が陥りやすいといわれる集団ヒステリーの原因のひとつに、狭い国土の割に、人口が多く、農耕のために密集しやすいというストレスの反動であるという指摘がある。これに加えて、年中、災害に見舞われることで、忍耐強い国民性を養う一方、それによるストレスのはけ口となって、集団ヒステリーが発現するということもあるであろう。だとしたら、集団ヒステリーを起こしやすい国民性を客観視する方策として、日ごろから自然災害を疑似体験する防災教育・訓練に取組む必要性があるのではないかとも思う。ただし「防災」といっても、口をあけていても助かるという仕組みを作るのではなく、あくまで国民個人個人の行動を伴うべきものであるのだが。

釜石湾に乗り上げた巨大貨物船。国民を驚愕させた風景も大震災から５年を前に記憶の彼方か。

　寺田師いわく。《災難に備えることのできる人たちを人間の優良種とするならば、災難は、優良種を選択するメンタルテストであるかもしれない。だとすると、災難をなくすればなくするほど、人間の頭の働きは平均して鈍いほうに移って行く勘定である》

戦後７０年―。ことあるごとに「集団ヒステリー」を連発している現代日本人のことを、寺田師は見通していたのだろうか。

（平成 27 年 7 月）